

・ 仕組商品投資に関する リスクの把握と管理

2009年3月

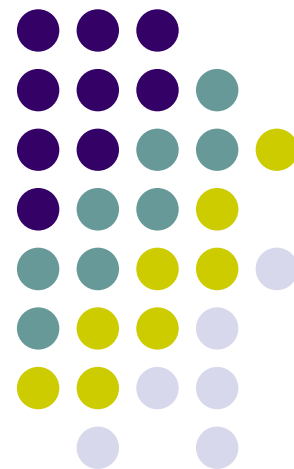
日本銀行金融機構局

金融高度化センター

橘 朋廣

E-mail: tomohiro.tachibana@boj.or.jp

Tel:03-3277-2838





はじめに

- ◆ 「 . 仕組商品投資に関するリスクの把握と管理」では、本編として、リスク管理の観点から、仕組商品を巡る論点を整理します。
- ◆ 次に、(参考)として、財務の観点から、最近の会計処理を巡る動きを整理します。



目次

1. 仕組商品とは
 2. 商品の仕組みとリスク特性
 3. シナリオ分析
 4. リスク管理上の留意点
- (参考) 会計処理を巡る動き
- (1) 時価の算定
 - (2) 債券の保有目的区分の変更
 - (3) 満期保有目的

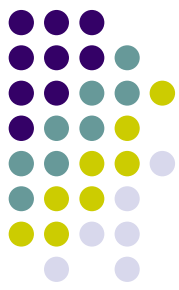


仕組商品投資のチェックポイント

どの様に、クーポン・償還の条件が決まっているか
(商品の仕組みを理解)

どんな場合に、クーポンが低下し、償還が発生するか
(商品のリスク特性を理解)

どの程度、クーポン(利鞘)・価格が低下するか
(リスクファクターの市場特性を理解
シナリオ分析を実施)



1. 仕組商品とは

- ◆ 仕組商品とは、投資家の多様なニーズに応えるため、通常の貸出、預金、債券に、スワップやオプションといったデリバティブ取引を組み合わせられて作られた商品。
 - 投資家がオプションを売る対価としてプレミアムを受け取ったり、クーポンにレバレッジを掛けることで、高めのリターンを狙った商品が多い。
- ◆ 組み込まれたデリバティブのリスク特性によっては、市場環境(国内金利、内外金利差、為替レート等)の変化が、価格や利回りに大きな変動をもたらすことがある。
 - 「元本が毀損しない」商品を「満期保有目的」に区分していても、クーポンが低下し、調達コストとの対比で、利鞘の縮小ひいては逆鞘に直面することがある。



- ◆ 仕組商品は、財務会計上は、仕組債、仕組預金、仕組貸出に分かれるが、商品によって、金利、為替、株価、信用など様々なリスクを内包する。
- ◆ このため、仕組商品は、「債券」、「預け金」、「貸出」といった会計科目に捕われず、各々の商品に応じた適切なリスク管理体制を整える必要がある（詳細は後述）。

仕組商品の事例と主なリスク要因

	リスク要因	国内金利	外国金利	為替	株価	信用
仕組債	リバース・フローター債					
	CMS債					
	パワー・リバース・デュアル債					
	日経平均リンク債					
仕組預金	コーラブル定期預金					
仕組貸出	クレジット・リンク・ローン					
	リバース・フローター・ローン					
	CMSローン					

(注) 発行体の信用リスクは共通。

2. 商品の仕組みとリスク特性



(1) リバース・フローター債

- ◆ 短期金利の低下時にクーポンが上昇し、上昇時にクーポンが低下するフローター債。

< 設例 >

クーポン: 3.4% - 1年LIBOR

$$= 1年LIBOR + (固定1.7\% - 1年LIBOR) \times 2$$

マルチコーラブル: 発行体が利払(半期)毎に期限前解約できる権利
投資家は、期限前解約権を売却する対価としてプレミアムを受取る。

ゼロフロア: クーポン 0%を保証

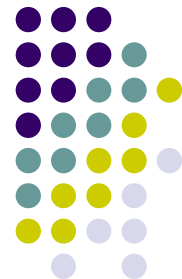
投資家は、ゼロフロア保証を購入する対価としてプレミアムを支払う。

発行・償還価格: 100円

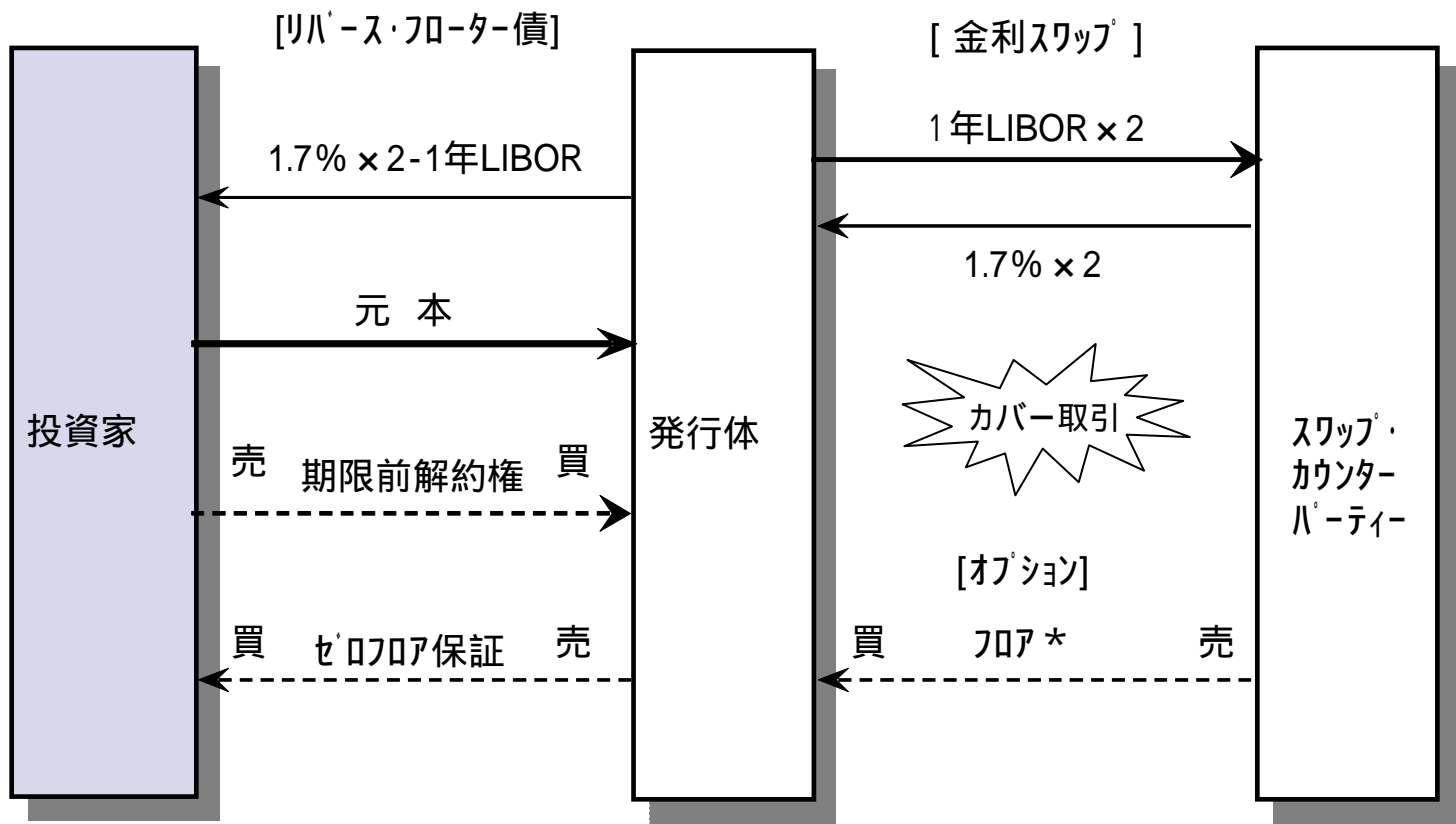
発行体: AA格

期間: 15年

基本的な仕組み

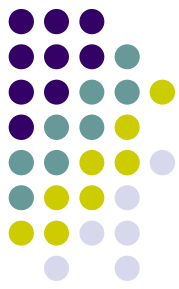


アレンジャー



* 3.4%-1年LIBOR 0

(注) プレミアムの受払いは省略。



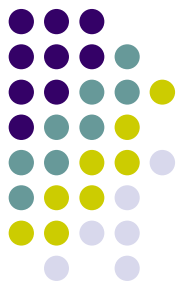
リスク特性

- 金利が上昇

クーポン(3.4% - 1年LIBOR)が低下し、債券価格が下落。
調達コストとの対比で、利鞘の縮小ひいては逆鞘に
に直面する可能性がある。

- 金利が低下

クーポン(3.4% - 1年LIBOR)が上昇し、債券価格が上昇。
期限前解約される可能性が高まる。
期限前解約された場合、予定運用利回りを得られない。



(2) CMS (constant maturity swap *) 債

* 短期金利 (ex. 1年LIBOR) と長期金利 (ex. 10年スワップレート) を定期的に交換するスワップ取引

- ◆ クーポンが長期金利 (スワップレート) に連動して変化するフローター債。
- ◆ 長期金利の上昇時にクーポンが上昇し、低下時にクーポンが低下。

< 設例 >

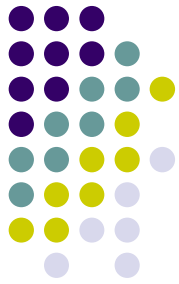
クーポン (利払いの1年前に決定) : 10年スワップレート
= 1年LIBOR + { (10年スワップレート - 1年LIBOR) - }

(注) には、市場レートの実勢や当商品参加者の信用力等が映じられる。

ゼロフロア : 既述のとおり

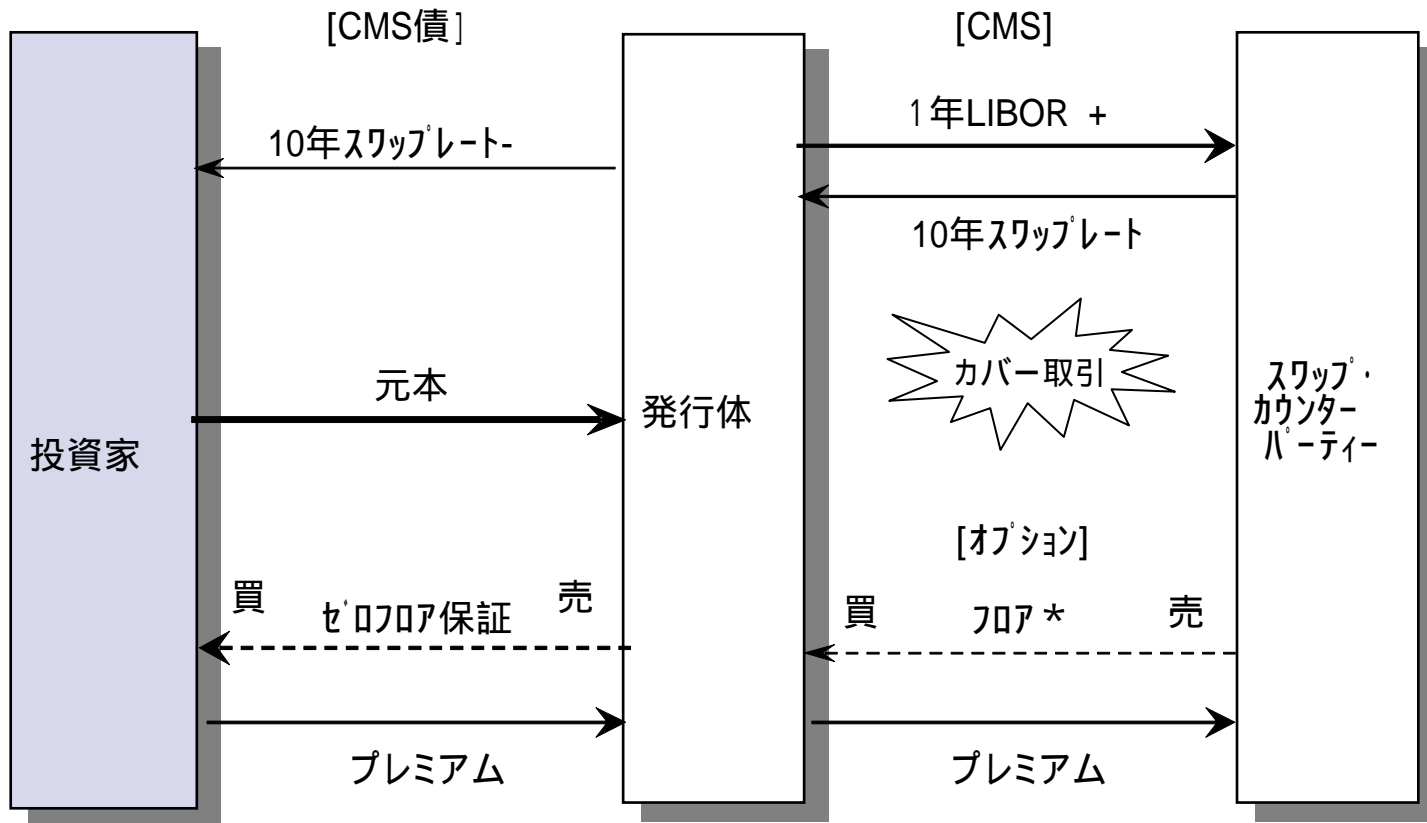
発行・償還価格 : 100円 発行体 : AA格

期間 : 15年



基本的な仕組み

アレンジャー



* 10年スワップレート- 0

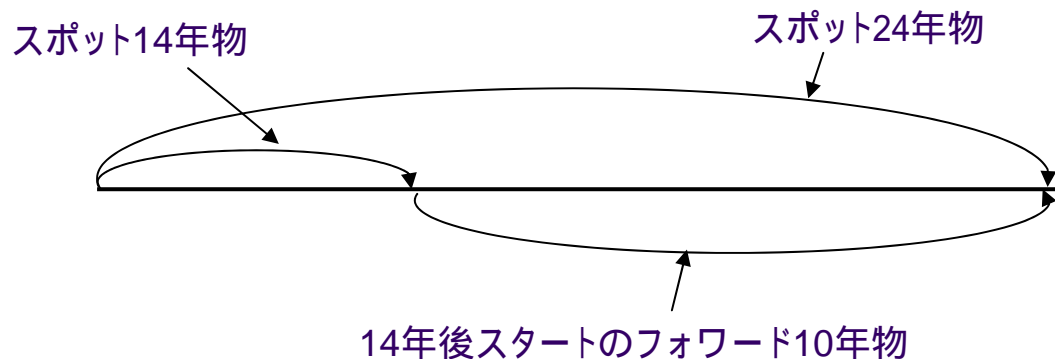


(参考)フォワードレート

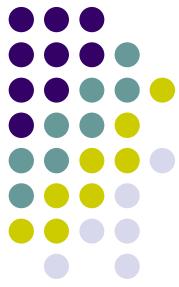
- ◆ フォワードレートとは、将来の1時点からその先の1時点までのレートのこと。
- ◆ スポットレートからフォワードレートを求めることができる。

例． 14年後スタートのフォワード10年物^(注)

$$= \sqrt[10]{(1 + \text{スポット24年物})^{24} / (1 + \text{スポット14年物})^{14}} \quad 1$$



(注) フォワードスポットレート(1年複利)



(参考) CMS債の理論価格イメージ(残存5年の例)

$$P = \frac{\text{直近の10年スワップレート} -}{(1 + 1\text{年物スポットレート})^1} + \frac{\text{1年後スタートの10年スワップレート} -}{(1 + 2\text{年物スポットレート})^2} + \frac{\text{2年後スタートの10年スワップレート} -}{(1 + 3\text{年物スポットレート})^3} + \frac{\text{3年後スタートの10年スワップレート} -}{(1 + 4\text{年物スポットレート})^4} + \frac{\text{4年後スタートの10年スワップレート} -}{(1 + 5\text{年物スポットレート})^5} + \text{元本}$$

1 ~ 5年の金利上昇は債券価格の下落要因。

フォワードレートの上昇は債券価格の上昇要因。

(注) 一般に、CMS債にはゼロフロアが付されている。この場合には、上記で求めた価値にフロアオプションのプレミアムを加える必要がある(但し、ここでは省略)。また、イールドカーブの将来変化を考慮する場合には、コンバクシティ調整を行う必要がある(但し、ここでは省略)。

(参考) CMS債の理論価格イメージ(続き)



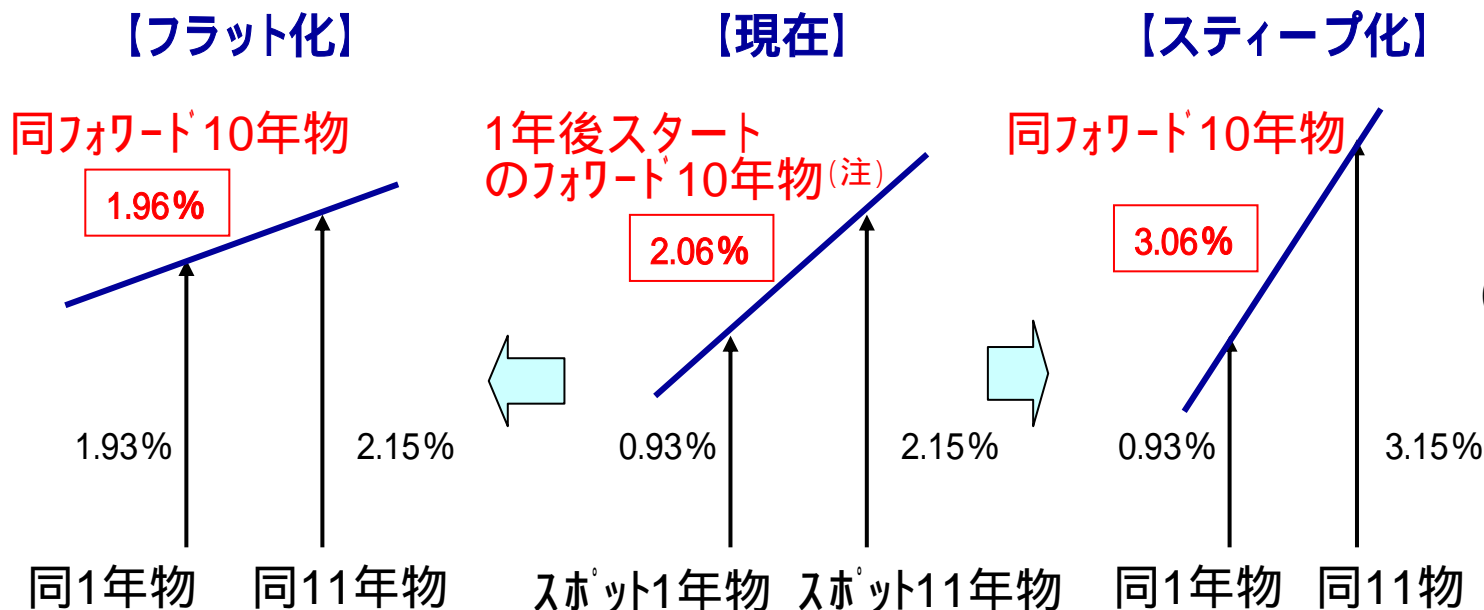
- 5年以内の金利が上昇(低下)すると、スポットレート(割引率)が上昇(低下)するため、債券価格は下落(上昇)する。

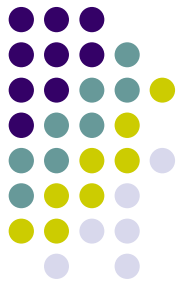
分母要因

特に、5年金利の上昇は、元本の割引率を上昇させるので、大きな下落要因となる。

- イールドカーブがフラット化(スティープ化)すると、フォワードレートが低下(上昇)するため、債券価格は下落(上昇)する。

分子要因





リスク特性

- 足許の金利が上昇しつつイールドカーブがフラット化
スポットレートが上昇、フォワードレートが低下
債券価格が下落。
調達コストとの対比で、利鞘の縮小ひいては逆鞘に
直面する可能性がある。



(3) P R D (power reverse dual) 債

- ◆元本償還が円建、クーポンが外貨建の債券(リバースデュアル債)。クーポン部分にクーポンスワップを数本組込むことでハイクーポン化。
- ◆クーポンレートは、各利払時の為替レートに応じて変動。

< 設例 >

クーポン : $\text{ドル}15\% \times \text{利払時為替レート} / 123\text{円} - \text{円}9.6\%$
 $\text{円固定}4.8\% + (\text{ドル固定}5\% - \text{円固定}4.8\%) \times 3$

マルチコーラブル : 既述のとおり

ゼロフロア : 既述のとおり

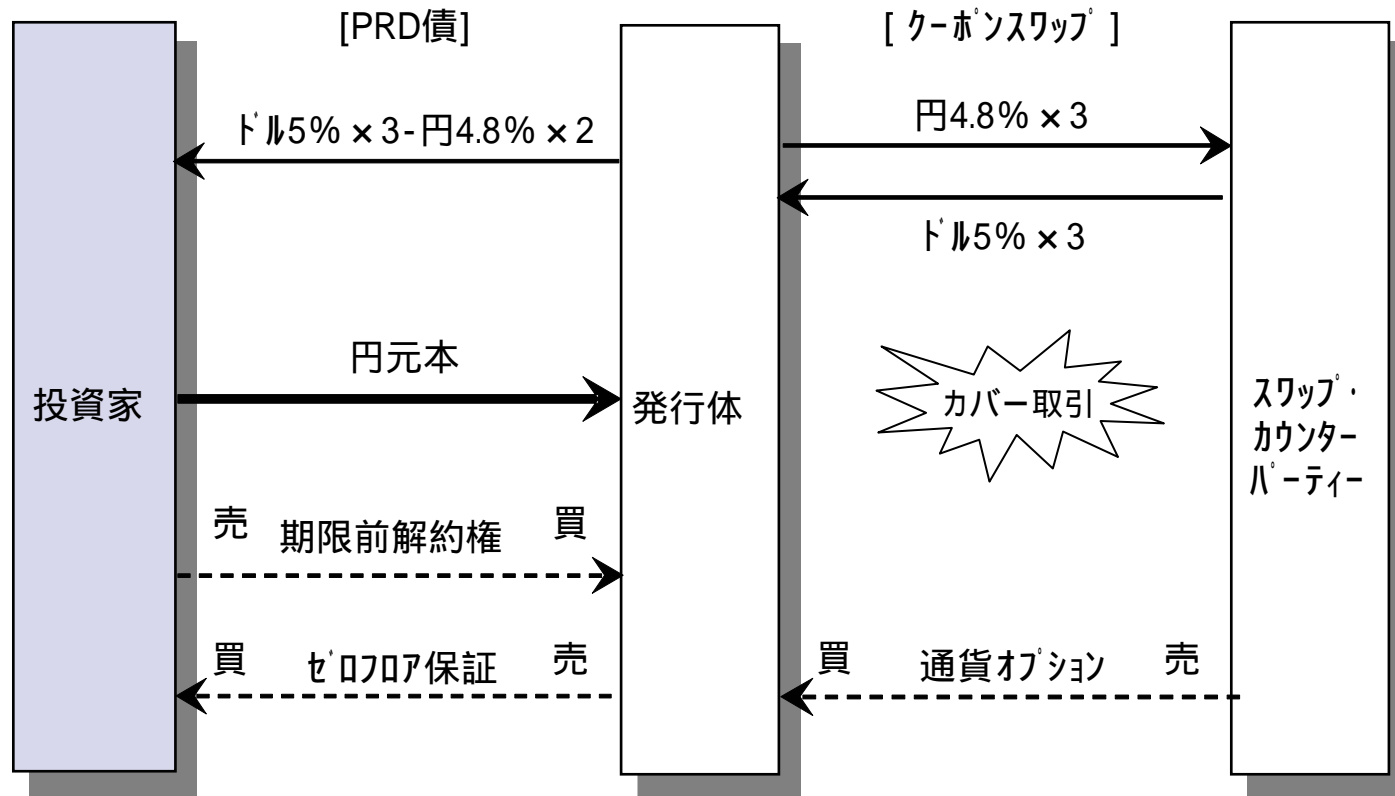
発行・償還価格 : 100円 発行体 : AA格

期間 : 15年



基本的な仕組み

アレンジャー



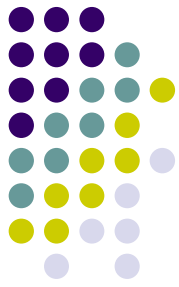
(注) プレミアムの受払いは省略。

リスク特性



クーポン: $\text{ドル}15\% \times \text{利払時為替レート} / 123\text{円} - \text{円}9.6\%$

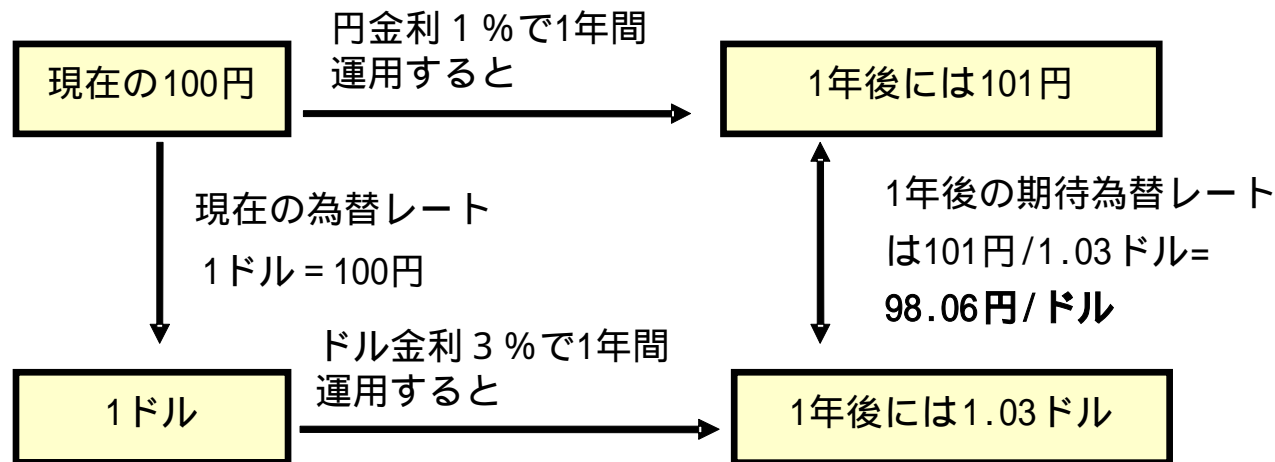
- 為替が円高化
将来のクーポンレートが低下。
債券価格が下落。
- 円金利が上昇
キャッシュフローの割引率が上昇。
キャッシュフローの現在価値が減少()。
//
期待為替レートが円安化(次頁)。
将来のクーポンレートが上昇()。
通常、 $>$ となり、債券価格が下落。
- 外貨金利が上昇
期待為替レートが円高化(次頁)。
将来のクーポンレートが低下。
債券価格が下落。



(参考) 金利変動の期待為替レートへの影響

例えば、 $t+0$ 期の為替レートが100円、円金利1%、ドル金利3%とした場合、 $t+1$ 期の期待為替レートは以下の式で求められる。

$$\begin{aligned} \text{t+1期の期待為替レート} &= \text{t+0期の為替レート} \times (1 + 1\text{年物円金利}) \\ &\quad (1 + 1\text{年物外貨金利}) \\ &= 100\text{円} \times 1.01 \div 1.03 = \mathbf{98.06\text{円}} \end{aligned}$$

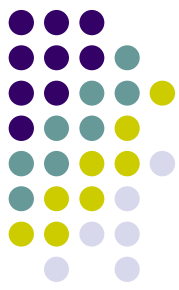


円金利が2%に上昇すれば、期待為替レートは円安化

$$\text{t+1期の期待為替レート} = 100\text{円} \times 1.02 \div 1.03 = \mathbf{99.03\text{円}}$$

ドル金利が4%に上昇すれば、期待為替レートは円高化

$$\text{t+1期の期待為替レート} = 100\text{円} \times 1.01 \div 1.04 = \mathbf{97.11\text{円}}$$



3. シナリオ分析

(1) シナリオ分析の重要性

- ◆ リスクの把握方法として、理論価格やVaRを計測することは有効な手段。ただ、理論価格やVaRだけだと、リスクファクターの変化が期間損益(利回り、利鞘)にどんな影響を与えるか、分かりにくい。
- ◆ 特に、仕組商品の場合、長期間の保有を前提に購入することが少なくない。また、流動性が低く、購入後の売却に制約があるものもみられる。
- ◆ このため、リスクファクターの変化が、期間損益(利回り、利鞘)にどのような影響を与えるのか、経営の観点から、「手触り感」を持って把握しておくことも重要。

特に、購入前の事前検討が極めて重要。



(2) シナリオ分析のポイント

メインシナリオ

- ◆ インプライド・フォワードレートやフォワード為替によって、現在の市場予測を把握。先行きの金利や為替が、現在の市場予測どおりに推移するという前提で、期間損益(利回り、利鞘)や価格の変化を認識する。

(注) なお、本稿のシナリオ分析では、ボラティリティやオプション性の影響を捨象しているため、仕組商品の理論価格は大掴みとなる点、ご留意願います。

ストレスシナリオ

- ◆ 仕組商品の仕組みを分析し、期間損益(利回り、利鞘)や価格にマイナスの影響を与えるリスクファクターを把握する。
- ◆ リスクファクターについて、大幅な利回り・利鞘の縮小や価格の下落をもたらすストレスシナリオを想定し、経営に与える影響度を認識する。

(3) シナリオ分析の具体例

金利シナリオ(4本)

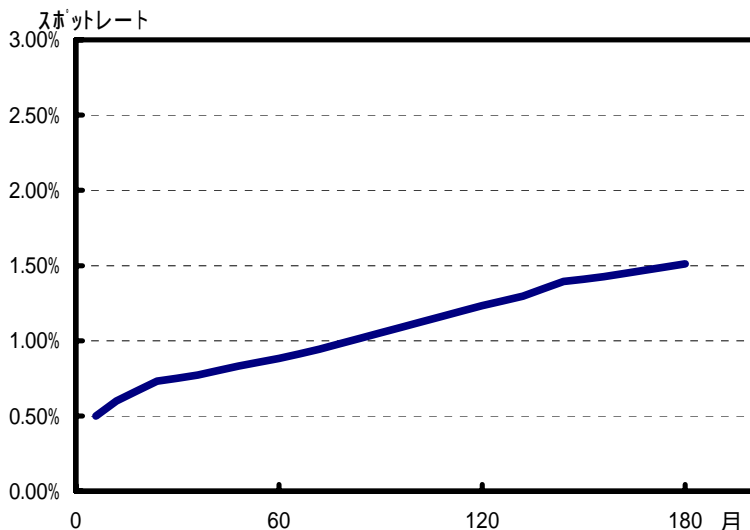


<メインシナリオ>

現在の市場レート(LIBOR、Swap)を前提とする。

	1年	2年	3年	4年	5年
*A スポット	0.60%	0.73%	0.77%	0.83%	0.88%
	現在	1年先	2年先	3年先	4年先
*B 1年LIBOR	0.60%	0.86%	0.85%	1.02%	1.09%
*C 10年Swap	1.22%	1.35%	1.51%	1.61%	1.71%

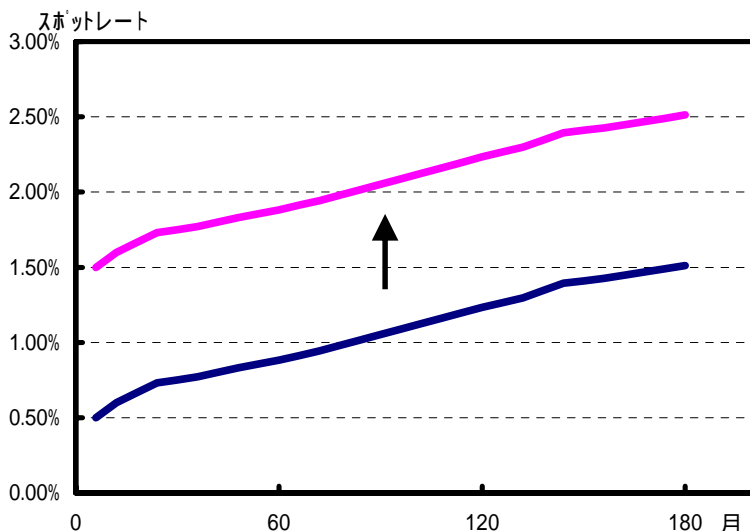
(注) 半年複利。以下、同じ。



<ストレスシナリオ: パラレルシフト>

イールドカーブが+1%上方にシフトする。

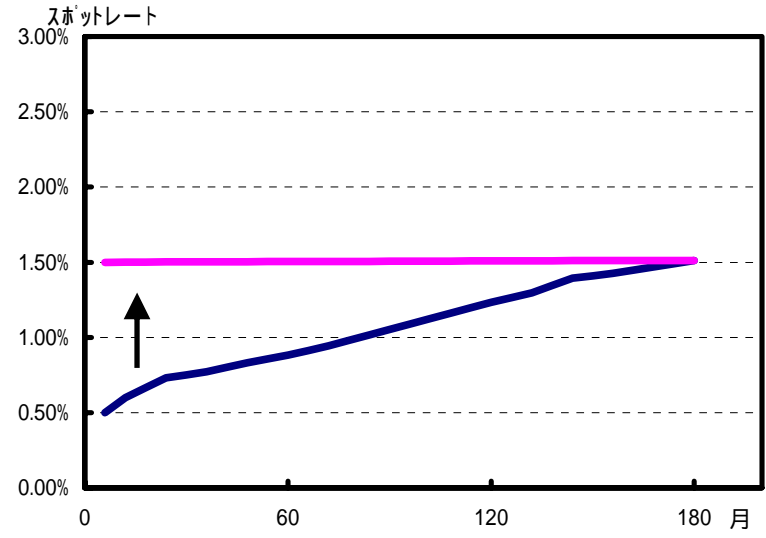
	1年	2年	3年	4年	5年
*D スポット	1.60%	1.73%	1.77%	1.83%	1.88%
	1年	1年先	2年先	3年先	4年先
*E 1年LIBOR	1.61%	1.87%	1.86%	2.02%	2.10%
F 10年Swap	2.21%	2.34%	2.49%	2.59%	2.70%





< ストレスシナリオ:フラット化 >

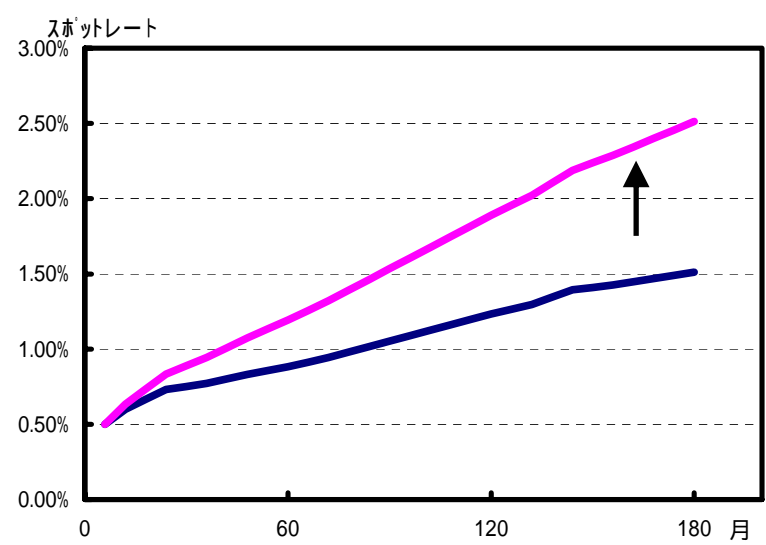
足許 (6M: +1%) のイールドカーブが
上昇する (15年物は不変)。



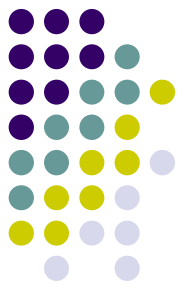
	1年	2年	3年	4年	5年
*G スポット	1.50%	1.50%	1.50%	1.50%	1.50%
	1年	1年先	2年先	3年先	4年先
*H 1年LIBOR	1.51%	1.51%	1.51%	1.51%	1.51%
*I 10年Swap	1.51%	1.51%	1.51%	1.51%	1.51%

< ストレスシナリオ:スティーブ化 >

長期 (15年物: +1%) のイールドカーブが上
昇する (足許は不変)。



	1年	2年	3年	4年	5年
J スポット	0.63%	0.83%	0.94%	1.07%	1.19%
	1年	1年先	2年先	3年先	4年先
K 1年LIBOR	0.63%	1.04%	1.16%	1.47%	1.68%
L 10年Swap	1.85%	2.11%	2.40%	2.63%	2.87%



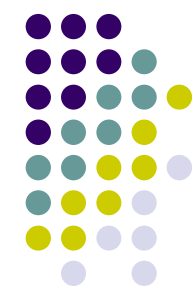
リバース・フローター債(残存5年の例)

◆メインシナリオ

現在のフォワードレート(*B)を前提にすると、金利の上昇予想から、利回りの緩やかな低下(a)に加え、調達コストの上昇(*B)から、利鞘は低下(b)する。

債券残高(元本)		100億円						
		1年	2年	3年	4年	5年	累計	
*B	金利シナリオ(メイン)	フォワードレート(1YLIBOR)	0.60%	0.86%	0.85%	1.02%	1.09%	
a	利回り(クーポン)	3.4% - 1YLIBOR	2.80%	2.54%	2.55%	2.38%	2.31%	
*B	調達金利	フォワードレート(1YLIBOR)	0.60%	0.86%	0.85%	1.02%	1.09%	
b	利鞘	-	2.20%	1.67%	1.69%	1.37%	1.22%	
c	キャッシュフロー(額面)	CF=元本×	2.8	2.5	2.5	2.4	102.3	112.6 億円
*A	割引率	r(スポットレート)	0.60%	0.73%	0.77%	0.83%	0.88%	
d	ディスカウントファクター	DF = 1 / (1+r/2)^(2*t)	0.99	0.99	0.98	0.97	0.96	
e	現在価値	PV = CF*DF	2.8	2.5	2.5	2.3	97.9	108.0 億円

(注) 金利は半年複利ベース。以下、同じ。

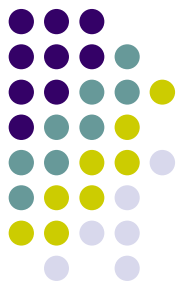


◆ ストレスシナリオ

金利 + 1% のパラレルシフト (*E) を想定すると、利回りの大幅な低下 (a) に加え、調達コストの上昇 (*E) から、2年目から逆鞘 (b) となる。評価損 (e) も発生する。

債券残高(元本) 100 億円

		1年	2年	3年	4年	5年	累計	
*E	金利シナリオ(パラレルシフト)	フォワードレート(1YLIBOR)	1.61%	1.87%	1.86%	2.02%	2.10%	
a	利回り(クーポン)	3.4% - 1YLIBOR	1.79%	1.53%	1.54%	1.38%	1.30%	
*E	調達金利	フォワードレート(1YLIBOR)	1.61%	1.87%	1.86%	2.02%	2.10%	
b	利鞘	-	0.19%	-0.34%	-0.32%	-0.65%	-0.79%	
c	キャッシュフロー(額面)	CF=元本 ×	1.8	1.5	1.5	1.4	101.3	107.5 億円
*D	割引率	r(スポットレート)	1.60%	1.73%	1.77%	1.83%	1.88%	
d	ディスカウントファクター	DF = 1 / (1+r/2)^(2*t)	0.98	0.97	0.95	0.93	0.91	
e	現在価値	PV = CF*DF	1.8	1.5	1.5	1.3	92.2	98.2 億円



CMS債(残存5年の例)

◆メインシナリオ

現在のフォワードレート(*C)を前提にすると、金利の上昇予想から、利回りは緩やかに上昇(a)するものの、調達コストの上昇(*B)から、1年目から逆鞘(b)となる。

債券残高(元本)		100億円						
		1年	2年	3年	4年	5年	累計	
*C	金利シナリオ(メイン)	フォワードレート(10Y Swap)	1.22%	1.35%	1.51%	1.61%	1.71%	
a	利回り(クーポン)	10Y Swap - 0.72%	0.50%	0.64%	0.79%	0.89%	0.99%	
*B	調達金利	フォワードレート(1Y LIBOR)	0.60%	0.86%	0.85%	1.02%	1.09%	
b	利鞘	-	-0.10%	-0.23%	-0.06%	-0.13%	-0.09%	
c	キャッシュフロー(額面)	CF = 元本 ×	0.5	0.6	0.8	0.9	101.0	103.8 億円
*A	割引率	r(スポットレート)	0.60%	0.73%	0.77%	0.83%	0.88%	
d	ディスカウントファクター	DF = 1 / (1+r/2)^(2*t)	0.99	0.99	0.98	0.97	0.96	
e	現在価値	PV = CF*DF	0.5	0.6	0.8	0.9	96.6	99.4 億円



◆ ストレスシナリオ

イールドカーブのフラット化 (*I) を想定すると、利回りの上昇が鈍化 (a) する一方、調達コストの大幅な上昇 (*H) から、1年目から逆鞘 (b) となる。評価損 (e) も発生する。

債券残高(元本)		100 億円						
		1年	2年	3年	4年	5年	累計	
*I	金利シナリオ(フラット化)	フォワードレート(10Y Swap)	1.51%	1.51%	1.51%	1.51%	1.51%	
a	利回り(クーポン)	10Y Swap - 0.72%	0.79%	0.80%	0.80%	0.80%	0.80%	
*H	調達金利	フォワードレート(1Y LIBOR)	1.51%	1.51%	1.51%	1.51%	1.51%	
b	利鞘	-	-0.71%	-0.71%	-0.71%	-0.71%	-0.71%	
c	キャッシュフロー(額面)	CF = 元本 x	0.8	0.8	0.8	0.8	100.8	104.0 億円
*G	割引率	r(スポットレート)	1.50%	1.50%	1.50%	1.50%	1.50%	
d	ディスカウントファクター	DF = 1 / (1+r/2)^(2*t)	0.99	0.97	0.96	0.94	0.93	
e	現在価値	PV = CF * DF	0.8	0.8	0.8	0.8	93.5	96.6 億円



為替シナリオ (2本)

<メインシナリオ>

現在の市場レートを前提とする。

(単位:円)

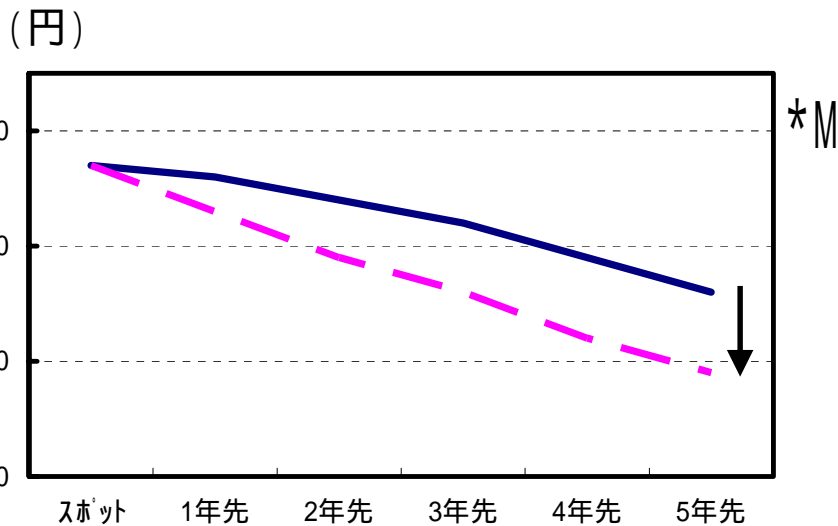
	1年先	2年先	3年先	4年先	5年先
フォワード為替	96	94	92	89	86

<ストレスシナリオ:円高化>

現在比、ほぼ2倍の円高ピッチ(年4%程度)とする。

(単位:円)

	1年先	2年先	3年先	4年先	5年先
フォワード為替	93	89	86	82	79
〃 変化幅	-3	-5	-6	-7	-7



*N

PRD債(残存5年の例)



◆メインシナリオ

現在のフォワードレート(*B)とフォワード為替(*M)を前提にすると、当面、高めの利回り(a)、厚めの利鞘(b)は享受できる見通し。

債券残高(元本)		100億円						
		1年	2年	3年	4年	5年	累計	
*B	金利シナリオ(メイン)	フォワードレート(1YLIBOR)	0.60%	0.86%	0.85%	1.02%	1.09%	
*M	為替シナリオ(メイン)	フォワード為替(Fex)	96.0	94.0	92.0	89.0	86.0	
a	利回り(クーポン)	$15% * (Fex/123) - 9.6%$	2.11%	1.86%	1.62%	1.25%	0.89%	
*B	調達金利	フォワードレート(1YLIBOR)	0.60%	0.86%	0.85%	1.02%	1.09%	
b	利鞘	-	1.51%	1.00%	0.77%	0.24%	-0.20%	
c	キャッシュフロー(額面)	CF=元本 ×	2.1	1.9	1.6	1.3	100.9	107.7 億円
*A	割引率	r(スポットレート)	0.60%	0.73%	0.77%	0.83%	0.88%	
d	ディスカウントファクター	$DF = 1 / (1+r/2)^{(2*t)}$	0.99	0.99	0.98	0.97	0.96	
e	現在価値	PV = CF*DF	2.1	1.8	1.6	1.2	96.5	103.3 億円



◆ ストレスシナリオ

金利 + 1% のパラレルシフト (*E) を想定すると、フォワード為替 (*M) が変動しなくとも、調達コストの上昇 (*E) から、2年目から逆鞘 (b) となる。評価損 (e) も発生する。

債券残高(元本)		100 億円						
		1年	2年	3年	4年	5年	累計	
*E	金利シナリオ(パラレルシフト)	フォワードレート(1YLIBOR)	1.61%	1.87%	1.86%	2.02%	2.10%	
*M	為替シナリオ(メイン)	フォワード為替(Fex)	96.0	94.0	92.0	89.0	86.0	
a	利回り(クーポン)	15%*(Fex/123)-9.6%	2.11%	1.86%	1.62%	1.25%	0.89%	
*E	調達金利	フォワードレート(1YLIBOR)	1.61%	1.87%	1.86%	2.02%	2.10%	
b	利鞘	-	0.50%	-0.01%	-0.24%	-0.77%	-1.21%	
c	キャッシュフロー(額面)	CF=元本×	2.1	1.9	1.6	1.3	100.9	107.7 億円
*D	割引率	r(スポットレート)	1.60%	1.73%	1.77%	1.83%	1.88%	
d	ディスカウントファクター	DF = 1/(1+r/2)^(2*t)	0.98	0.97	0.95	0.93	0.91	
e	現在価値	PV = CF*DF	2.1	1.8	1.5	1.2	91.9	98.4 億円



◆ ストレスシナリオ

為替の大幅な円高化 (*N) と金利の +1% パラレルシフト (*E) を想定すると、利回り・利鞘とも大きく低下し、2年目から逆鞘 (b) なる。評価損 (e) が拡大する。

債券残高(元本)		100 億円						
		1年	2年	3年	4年	5年	累計	
*E	金利シナリオ(パラレルシフト)	フォワードレート(1Y LIBOR)	1.61%	1.87%	1.86%	2.02%	2.10%	
*N	為替シナリオ(ストレス)	フォワード為替(Fex)	93.0	89.0	86.0	82.0	79.0	
a	利回り(クーポン)	$15% * (Fex/123) - 9.6%$	1.74%	1.25%	0.89%	0.40%	0.03%	
*E	調達金利	フォワードレート(1Y LIBOR)	1.61%	1.87%	1.86%	2.02%	2.10%	
b	利鞘	-	0.14%	-0.62%	-0.97%	-1.62%	-2.06%	
c	キャッシュフロー(額面)	CF=元本 x	1.7	1.3	0.9	0.4	100.0	104.3 億円
*D	割引率	r(スポットレート)	1.60%	1.73%	1.77%	1.83%	1.88%	
d	ディスカウントファクター	$DF = 1 / (1+r/2)^{(2*t)}$	0.98	0.97	0.95	0.93	0.91	
e	現在価値	PV = CF*DF	1.7	1.2	0.8	0.4	91.1	95.2 億円

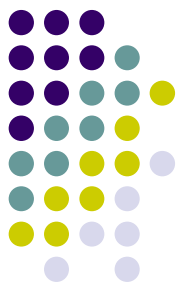


4. リスク管理上の留意点

(1) 購入前の検討

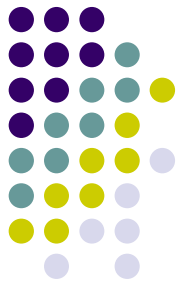
- ◆ 仕組商品の仕組みを分析し、利回りの低下、価格の下落をもたらすストレス事象を洗い出す。
- ◆ シナリオを想定し、リスクが顕現化した場合の経営への影響を把握する。
- ◆ 理論価格の論理的背景を理解して、合理的に価額を算定し、販売業者から提示された価格の妥当性を確認する。

上記が困難な場合には、複数の販売業者から価額の提示を受けて、その妥当性を確認する。



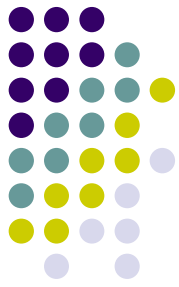
(1) 購入前の検討(続き)

- ◆ リスクが顕現化した場合に備え、流動化・ヘッジ手段があるか(実現可能か)を確認する。
 - 仕組商品は、市場流動性がかなり低いものが少なくないため、販売業者への売却が、常に成立するとは限らない。
 - 実際の売却価格が、理論価格よりもかなり低くなることも想定しておく。
 - ヘッジ手段はあっても、デリバティブ市場での取引実績等がないと、ヘッジ取引の取引相手が見付からないことも多い。



(2) 購入時の決裁手続き

- ◆ 仕組商品の購入にあたって、決裁手続きを定めておく。
 - 他の商品と同様に、決裁権限を明確にする。
 - このとき、経営への影響からみて、一部の役職員に対し、過大な権限枠が設定されないように配慮する。
- ◆ 「債券」、「預け金」、「貸出」といった会計科目により、審査手続きが異なる場合、購入部署は、知識・ノウハウのあるリスク管理部署や市場部署と連携・協議する。
 - 例えば、金融機関によっては、仕組貸出(ex. CMSローン<主に金利リスク>)は審査部のみが事前審査するケースがみられる。
 - 科目の如何に捕われず、リスク管理部署やALM委員会等への協議・審査を義務付けることも一案。



(2) 購入時の決裁手続き(続き)

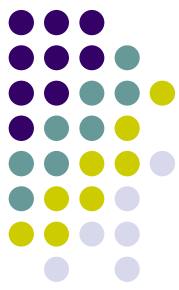
- ◆ 特に、新しい仕組商品の購入や、決裁権限内であっても多額の投資を行う際は、リスク管理部署やALM委員会等への事前協議を義務付けることが望ましい。
- ◆ 損失限度額、アラームポイントを設定する。
 - 評価損が一定レベルに達した場合にどうするか、事前に対応策、ロスカットルールを定めておく。
 - 但し、満期保有目的の場合、満期保有の意図・能力に抵触しないように留意が必要(監査法人の意見を聴取)。
- ◆ 種類別の保有限度額を定めておくことも一案。



(3) 購入後のモニタリング

- ◆ 市場価格(理論価格)に基づき、評価損益を定期的に確認する。
 - 上記が困難な場合でも、
 - ✓ 購入業者から時価情報を入手して、評価損益をフォローする。また、他の業者から価額を聴取して、その妥当性をチェックする。
 - ✓ 併せて、経営に与える影響の大きさによっては、自ら合理的に価額を算定できる体制の整備について検討する。
- ◆ 現時点で評価益超であっても、先行きの市場環境の変化により、リスクが顕現化する可能性がある。そこで、シナリオ分析により、経営に大きな影響を及ぼすリスクを認識する。

(参考) 会計処理を巡る動き

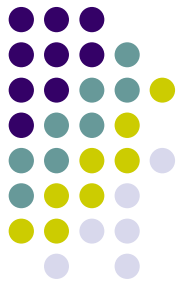


(1) 時価の算定

- ◆ 企業会計基準委員会では、最近の金融市場の混乱を背景に、現行の金融商品会計・実務指針等における、時価算定に関する実務上の取扱いについて、以下の点を確認した(08/10月)。
 - 取引が活発でかつ流動性の高い市場において取引されている場合には、市場価格を時価とする。
 - 実際の売買事例が極めて少ない金融資産や、売手と買手の希望する価格差が著しく大きい金融資産については、時価は、基本的に、経営陣の合理的な見積もりに基づく合理的に算定された価額^(注)による。
 - 自社における合理的な見積もりが困難な場合には、ブローカーから入手した価格^(注)を合理的に算定された価額とすることができる。

(注) 以下のような方法で算定された価額をいう。

- (1) 取引所等から公表されている類似の金融資産の市場価格に、利子率、満期日、信用リスク及びその他の変動要因を調整する方法。
- (2) 対象金融資産から発生する将来キャッシュ・フローを割引いて現在価値を算定する方法。
- (3) 一般に広く普及している理論値モデル又はプライシング・モデル(例えば、ブラック・ショールズ・モデル、二項モデル等のオプション価格モデル)を使用する方法。



(2) 債券の保有目的区分の変更

◆ 債券の保有目的区分の変更を一部認める(08/12月)。

振替後 振替前	その他有価証券	満期保有目的の債券
売買目的有価証券	(改正前) 一定の場合、可 (改正後) 上記の一定の場合に加え、稀な場合(*1)に、保有目的区分を変更(*2)したときは、可 ⇒振替時の時価をもって振り替え、振替時に生じる評価差額は、当期の損益に計上する(*3)	(改正前) 不可 (改正後) 稀な場合(*1)に、満期保有目的の債券の定義及び要件を満たしたうえで保有目的区分を変更(*2)したときには、可 ⇒振替時の時価をもって振り替え、振替時に生じる評価差額は、当期の損益に計上する(*3)
その他有価証券		(改正前) 不可 (改正後) 稀な場合(*1)に、満期保有目的の債券の定義及び要件を満たしたうえで保有目的区分を変更したときには、可 ⇒振替時の時価をもって振り替え、振替時に生じる評価差額は、その他有価証券に係る評価差額として純資産の部に計上し、満期までの期間にわたって償却原価法の処理に準じて損益に振り替える(*3)

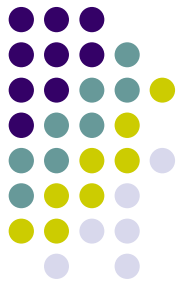
(*1) 想定し得なかった市場環境の著しい変化によって流動性が極端に低下したことなどから、保有する債券を公正な評価額である時価で売却することが困難な期間が相当程度生じているような稀な場合を指す。

(*2) 企業がもはや時価の変動により利益を得ることを目的としないことを明らかにすることを前提とする。

(*3) 保有目的区分の変更に関し、追加情報として、一定の注記を行う。

出所) 企業会計基準委員会: 実務対応報告第26号「債券の保有目的区分の変更に関する当面の取扱い」

◆ 2010年3月末までの適用(以降の取扱いは別途検討)。



(3) 満期保有目的

- ◆ 以下は、満期保有目的に区分することの留意点。
 - 元本が確保されていることと、満期までの保有意図と能力があることが前提。
 - 償還期限前に、満期保有目的の債券を区分変更したり、売却した場合、残りの全ての満期保有目的の債券を区分変更しなければならない。
 - また、翌事業年度まで、満期保有目的の債券に区分することはできない。

出所) 企業会計基準委員会: 企業会計基準第10号「金融商品に関する会計基準」

日本公認会計士協会: 会計制度委員会報告第14号「金融商品会計に関する実務指針」



- 本資料に記載している内容について、他の公表物に転載・複製する場合には、あらかじめ日本銀行金融機構局金融高度化センターまで連絡し、承諾を得て下さい
- 本資料に掲載されている情報の正確性については万全を期しておりますが、日本銀行金融機構局金融高度化センターは本資料の利用者が本資料の情報をを用いて行う一切の行為について、何ら責任を負うものではありません

以上